
戦え！ キグルマン

mmo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦え！ キグルマン

【コード】

N9923D

【作者名】

mom

【あらすじ】

どうでもいい者たちの世界に、不必要なヒーローが誕生する。

第一話 いらないヒーロー

現在地球の総人口は200億人。

皆さんが知る数字をはるかに越えていると思われる。
いや。

その殆どがいららない人間なので。

数のうちには入らない。

でしょ？

そしてまた。

この世界にとってどうでもいい少年が。

愛する少女を守るために。

あえてその身をヌイグルミへと変えた。

今ここに。

誰も知らない。

誰にも愛されない。

もっとも不必要なヒーローが誕生す。

『 戦え！ キグルマン 』

少年はクマのヌイグルミを掴み。
少女はロボットのおもちゃを手にしていました。
二人の誕生日は一緒に。
いつもどおりプレゼントの交換を行います。
少女はヌイグルミを抱きしめ。
少年はロボットでおおはしゃぎをしました。
ただ。
互いに欲しいモノではなかったのですが。
ちよつと残念な心内を抑えながら。
気を使つて笑い合える。
そんな仲でした。

2月14日。

少女は少年にチョコレートを渡しました。
彼は甘いものは嫌いなのですが。
その日だけは我慢するものと決めていきます。
彼は綺麗に包装された包み紙を簡単に引き破りました。
少女はちよつと残念そうな顔を浮かべ。
少年の笑顔を待ちます。
箱を開けました。
彼は二カツと作った笑いを浮かべました。
彼女も二カツと笑いました。
ですが少し異変。
二人とも中を覗き込みます。
ハート型のチョコが割れていました。
少女は泣き始めました。
少年には何故泣くのか分かりません。
学校の女生徒だけが知るジnkクスで。
割れたハートを送ると。

決して恋人同士にはなれない。

それどころか送った相手を殺してしまうという残酷な噂話。「割れたって、チョコはチョコだよ」と。

少年は無理に食べ始めました。

無理に。

甘い刺激が彼の喉奥をかき混ぜる。

そして吐きました。

苦しみました。

少女は絶望しました。

ジंकウスは本当だったと。

少年は大丈夫だよと力ない声を発したのですが。

少女の耳には届かず、彼女は部屋へと閉じこもりました。

それ以来。

部屋のドアは開かない。

どうしても彼女に会いたいと思った少年は。

ある秘密組織をたずねました。

秘密といっても、それほど大層なものではなく。

世間から興味を抱かれないので。

誰も知らないといった塩梅でございます。

ですが。

必要の無い人間同士は知っているんです。

少年は考えました。

彼女の大好きなクマのヌイグルミになれば。

もしかしたら部屋に入れてくれるのではないかと。

秘密組織はその申し入れを快く受け入れ。

彼の身体を培養液で保存し。

少年の魂を、クマのヌイグルミに憑依させました。
そして今ここにヒーローが誕生したのです。

魂を持ったヌイグルミ。

クマのキグルミ。

キグルマン。

太陽の光も。

月夜の闇も。

少女には必要ない。

人口の光で塞ぎ込むだけ。

部屋の中には、クマのヌイグルミがたくさんあった。

少年の思い込みでプレゼントされ続けた品々。

好きじゃないクマ。

でも、もう必要ない。

だから、もういららないんだ。

捨てよう。

捨て・・・。

どうしよう。

いらぬものが、捨てられませんでした。

カチッ

部屋の窓が鳴りました。

猫でもいるのかな？

少女は猫が好きだったのです。

だが、残念なことに。

カーテンを開けば、そこにはクマのヌイグルミのため息。

だけれど、きつとこれは彼が置いていってくれた。

少女はその優しさだけに感動して、クマを抱きしめました。クマは少し赤くなりました。

少年に会いたい。

会いたい。会いたい。会いたい。

しかし少年は行方不明です。

少年の姿は街から消えました。

警察は捜査をたいして行っではおりません。

彼は知らない人間だから。

少女は朝から晩まで、歩き続けました。

彼を探し続けたのです。

少年は少女にも自分の正体を明かさなかったのです。

それがヒーローの宿命と。

テレビに教わったのです。

少女が靴を履き潰した時でも、まめが潰れたときでも。

キグルマンは彼女のカバンにぶら下がったままです。

今日も。

そしてまた今日も。

また次の今日も。

少女は少年を探しています。

そして見つけました。

彼女の大好きな。

猫を。

猫はこちらに近寄ってきます。

彼女は喜びの笑顔。

だけど猫は、少女のカバンに付いていたヌイグルミを。

ハムハム

噛み千切り、口にくわえたまま逃げ出しました。

千切れたのはストラップの紐。

キグルマンにとって不幸中の幸い。

キグルマンは必死に抵抗しました。

キグルマンパンチを放ちました。

キグルマンキックを浴びせました。

キグルマンビームは出ません。

綿の攻撃は、全く効果はありません。

猫とキグルマンがじゃれあっている内に声が聞こえてきました。

少女がキグルマンを探す声。

そして、もう一つ別の声。

男の子の声。

良く見れば猫には首輪と鈴がついている。

少女が近づくと、キグルマンはピタリと動きを止めました。

ヒーローは正体を明かしてはいけません。

猫は男の子に抱き上げられました。

少女はうれしそうに猫の頭や顎や肉球を撫で回しています。

少女と男の子のおしゃべりの中。
キグルマンは動こうとはしませんでした。
たとえヒーローじゃなかったとしても。
正体を明かしちゃいけないんだ！

男の子が帰り。

少女は思い出したかのようにキグルマンを見つけ。
家へと帰りました。
まだお昼だったけれど。

少女は縫い物が下手でした。
いや、不器用なりに縫えるとは思っていますが。
彼女は母親にキグルマンを手渡しました。
飛び出たハラワタを。
母親はしっかりと収納して行きます。

また同じ場所で。
少女と男の子が会いました。
また同じ箇所を。
キグルマンは噛まれました。
また同じように。
母親がハラワタを納めました。

今日も。

キグルマンと猫との戦いが始まった。

少女は眠れなかった。

なぜか眠れなかった。

夜の街を歩く。

新品の靴で、綺麗な足で、恋する顔で。

何もかも忘れた綺麗な身体で。

「コノ野郎、今までの俺だとは思っなよ！」

「フニヤ？」

男の子は猫を探していた。

いや、本当は何を探していたのやら。

「今日は手に石を仕込んできたんだ。遠慮なくかかってこい」

「フニ？」

夜を歩き。

そして少女を見た。

「キグルマンパァー……ンチ！」

「フニヤァー……!!」

男の子の姿を。
恋人の姿を。
割れないハートの相手を。

「キグルマンキーーーーーック」

「フニヤニヤ？」

「しまった！ 足には仕込んでなかったんだ！」

二人は出会った。

恋する二人が夜の街で。
意図せず、偶然に。

「キグルマンビィーーーーム」

「・・・」

「出ろ～出るんだ～出てくれビィイム！」

「フニヤアアア～」

「奇跡よ！ 起これエエエエ」

二人は奇跡だと思った。

ロマンチックだと思った。

運命だと思い込んだ。

「全生命をコノ手に込める！ 魂の最後の叫びだ！ 何があっても
どんな困難があっても彼女を守るんだ！ キグルマンファイナルイ
リュウウウウウジョン！」

「フニィ〜」

「アチャャー！！！！！！！！！！」

男の子にとって猫はただの口実。

少女にとってヌイグルミはアクセサリ。

男の子にとって猫は不必要。

少女にとってヌイグルミは不必要。

いらぬもの。

どうでもいいもの。

いらぬ。

朝。

破れしキグルマン、ハラワタを引きずりながら歩く。

痛くはない、でも負けた。

彼女を守れない。

ゴミ捨て場。

クマのヌイグルミが捨てられていた。

少年がプレゼントしたヌイグルミが全て。

キグルマンはヌイグルミを見た。

ヌイグルミはキグルマンを見た。

もう彼女を守れない。

キグルマンは家へと帰らず、秘密組織へと向った。
秘密組織には少年の体が保存されている。
だから、今なら元の身体に戻ることが可能だ。

けれど。

「僕の身体をずっと保存してください。そしていつか彼女が事故か病気が、何か不幸なことが起こったときに、僕の体を使ってください。あの・・・僕等兄妹だから、たぶん大丈夫だと思います。お願いです！僕を使ってください！」

少年の身体は使われることはありませんでした。
彼の体が不必要なほど、少女は幸せな人生を送ったのです。
そして。

秘密組織にとっても不必要な彼の身体は。

今でも、物置にしまわれ。
ゆっくりと朽ちている。

「キグルマンビーム！　・・・あつ、出た」

第二話 名無しのヒーロー

現在地球の総人口は200億人。
皆さんが知る数字をはるかに越えていると思われる。
いや。

その殆どがいららない人間なので。
数のうちには入らない。

例えば彼方が誰かに必要とされたとする。

大切な人だと言われる。

でも。

彼方の本質は何も変わらない。

世界から見下された。

不必要な人間であることは。

そしてまた。

誰も知らない。

誰にも愛されない。

下らないヒーローが現れる。

『 戦え！ キグルマン 』

彼の小さな手足。

走ったところでその速度は知れている。

超人的な力を持たない。

無駄骨ヒーロー。

「古墳はイヤアア古墳はイヤアアアアア!!!」

何時だって後の祭り。

彼が駆けつけたときは全てが終わっている。

誰もいない。

何も無かったかのように。

被害者は古墳の中で眠っている。

考えてみれば。

キグルマンより巨大暴走ハニワのほづが必要とされているのかも
しれない。

ちゃんとお墓を用意してくれる親切。

ヒーローは何もしてあげることが出来ない。

彼の住処はゴミ捨て場。

中間達と共に眠りにつく。

朝、目覚めればいつも一人ぼっち。

けれどその日だけは違った。

何かの間違いが起こったんだ。

目覚めてみれば。
誰かの手に握られている。
やっと回収されるのかな。
車が動いている。
もう一眠り。

とある屋敷に着くまで。
彼はゴミの島の夢を見ていた。

その屋敷は。
とくに世間からとやかく言われるほどのモノじゃない。
ただ、彼が連れて行かれた部屋だけ違った。
所狭しと人形が並んでいる。
首だけの人形、無機質にずっと動き続ける人形、同じ言葉をしゃべり続ける人形。
ああ、ここは夢で見たゴミの島と同じだ。
キグルマンは居心地が良かった。

ギグルマンを見つけたのは。
彼が愛した少女より、少しばかり小さい女の子だった。
人形を集めるのが趣味のバカな女の子。
綺麗な人形も汚い人形も彼女にとっては一緒くた。
新参者の彼を他の皆に紹介する。
「カラカラ！ ケラケラ！ 今帰ったよ。ゴンゴンもサラサラも
元気だった？」

彼女には人形につける名前に法則性があり。

擬音を二回繰り返し返したような名前をつける。

「ね〜ね〜新しいお友達連れてきたんだよ。へろへろもうれしいですよ？」

えつとね〜えつと・・・ね〜・・・タマタマちゃんだよ〜」
だれがタマタマだ！

「みんな〜仲良くしてね〜」
なんでタマタマなんだ！

別にこの女の子には。

辛い境遇も無く、身の上話もない。

しいて言えば、母親が現在行方不明というだけだが、それが全くなんだというのだろう。

彼女は能天気だった。

その能天気に。

キグルマンは油断をしていた。

夜中もつそり動く姿を。

女の子に見られてしまったのだ。

「わ〜わ〜わ〜・・・タマタマちゃん、すごいー！」
タマタマやめろ！

ヒーローは。

みだりに自分の正体を人に見せてはいけない。
彼はテレビで教わった。

しかしこんな簡単に・・・。

「ねえ〜タマタマあ〜」
それからというものの、女の子はキグルマンを小脇に連れ、
いろいろ語りかけるようになった。
でも。

タマタマじゃないもん！

「どうしたの。ねえねえ・・・タマタマあ〜」

僕がプイツと横を向くと。

彼女はクスクスと笑う。

ふざけるんじゃないねえ！

「ね〜ね〜コロコロもテロテロもタマタマみたいに動いてくれない
の・・・」

うっしやい！

「どうしてなのかな〜、ねえねえタマタマあ〜」

うっしやい！

「ねえねえ、考えたんだ。プルプルもタラタラもみんな死んじゃっ
てるんじゃないかな？ ねえねえタマタマあ？」

き〜こ〜え〜な〜い〜！

「だったら、お墓作ってあげないとねえ、タマタマあ？」

あ〜あ〜あ〜！

「家ねえ、地下室があるんだ。そこお墓にするの。一人じゃ淋しい
から、みんな一緒。お母さんもいるんだよ。ちよっとうらやまし
いな、ねえタマタマあ」

あ〜！！！！！！

「私一人じゃソロソロ達をみんな運ぶの大変だからタマタマも手伝

つてね」

ぶう・・・

「そうだ、タマタマも見た？ 私の新しいお母さん。ねえねえ、すつごく綺麗なんだよ。すつごく優しい人なんだよ。おっぱいがすつごく大きいんだよ。でもねみんな悪口言うんだ“土偶”みたいだつて。私が持つてる土偶のドグドクちゃん変じゃないもん！ お母さんも変じゃ無いもん！」

ふんッ！

「タマタマあ・・・つぶれてるよ」

・・・

「もつとちっちゃいのでいいからねタマタマあ」

ふん！

「早くお墓完成させなきゃね、ねえタマタマあ」

「本で読んだんだよ。お墓には宝物を入れなきゃならないんだつて、何がいいかな？ねえタマタマあ」

「真珠！ 昔のお母さんの宝箱にあった真珠！ これを散りばめよ。ねえタマタマあ」

「もうすぐ完成、ありがとねタマタマあ・・・あれ？ お墓にお父さんがいる」

「新しいお母さんがね私の事、不憫だとかかわいそうな子とか言うんだよ。ねえねえ私つて変かなタマタマあ？ でもいいんだ、お母さんはねそういう時は決まって私を抱きしめてくれるんだから・・・えへへへへ」

「新しいお母さん・・・かわいそう」

「お父さんねやっぱり昔のお母さんの方がいいみたい。いつも一緒にお墓にいるんだよ。ダメだよねえ、男の人はケジメをつけなきゃ、うんうん」

「お墓完成　お祝いよタマタマあ。ケーキケーキケーキ
ーケーキー　一緒に食べようね。彼方の分も用意させたから、でもタマタマは食べられないんだよね〜・・・へっへっへっ」

「今日からお手伝いさんはいなくなるんだって。お金が無いからって、でもね私見たよ、お手伝いさんにいっぱいお金あげてるの、うん、そうだ！あのね・・・そのね・・・新しいお母さんがね・・・料理作ってくれるのよお〜」

「まじゆい」

「ふふふふふ　今日新しいお母さんと遊園地に行くんだ、タマタマはお留守番ね」

「そうだ！　お墓には門番がいるんだよ、だからタマタマはお墓の中でみんなを守って頂戴。お願い・・・ねっ」

「はっ！　タマタマ隊長！　元気だったでありますか！」

「ねえタマタマは元気？　あたしね〜最近すぐ疲れちゃうんだ」

「タマタマあ久しぶり〜」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

辛い思い出を、人間は忘れることが出来る。
それで精神のバランスが整うから。
ただ。

一番最初に忘れることといえば。
どうでもいい事から忘れていくんだ。

女の子はお墓に現れなくなった。
もう女の子じゃないのかもしれない。
キグルマンはずっと墓を守り続けていた。
仕事は無い。

ここはネズミも入ってこない。
でも以前よりは良かった。
誰も守れないヒーローだった頃より。

お墓が開いた。
あれは女の子の新しい母親。
新しい人形を抱えている。
お墓に新しい入居者を拒む理由があるか？
門番は快く受け入れた。
ただ、その母親が。

新しい人形を乱雑に放り投げたのは気に入らなかったが。

扉の錠が閉まった音がした後は、
静寂。

白い人形はしばらくして、かすかに動き始めた。

口を動かして、指が動いた、目が開いた。

ただ、それだけ立ち上がりもしない。

壊れた人形。

「・・・ここは・・・お墓？」

人形はテープに吹き込まれた言葉を話す。

「私ね・・・もうすぐ死んじゃうんだ・・・優しいお母さんがね・・・

・最後は本当の両親と一緒にいたほうがいいって・・・よかった・・・

・ここ、お墓だよね？」

キグルマンはゆっくりと人形に近づいた。

「あつ・・・久しぶり・・・ずっと、守っててくれたんだね・・・

えっと、名前なんだっけ？」

人はどうでもいいことから忘れていく。

「カラカラ？ ケラケラ？ うんとね・・・」

でも、思い出そうとしてくれている。

その出来事だけが少しうれしい。

「私これから死んじゃうんだよね、死んじゃうんだよね・・・やっ

ぱりお墓作っておいて良かったね・・・みんなと一緒にだから淋しく

ないよね・・・お父さんもお母さんも一緒にだから楽しいよね・・・

彼方も一緒にだから安心だよね・・・へへへ？ コロコロ？」

僕はそんな名前なんかじゃない！

「ねえねえ・・・」

僕は彼方を守れない！

「ねえ・・・」

僕はッ・・・

「・・・タマタマあ・・・助けて・・・」

破れ汚れた布の隙間から。
助けを求める声が聞こえた。

行け行けキグルマン！
GO GO キグルマン！
今こそ閉ざされし冥界の門を打ち破り。
死者を甦らすんだ！

「キグルマンビーム！」

人形たちは。

破れた身体の隙間から聞える。

「巨大暴走ハニワだあああああああ！！！！！！」

「古墳はイヤダアアアアアアア！！！！！！」

僕は助けることが出来ない。

守ることは出来ない。

「ハニワに囲まれたアアアアア！！！！！！」

「ハニハニ言ってるー！！！！！！」

「手をつないで踊ってるー！！！！！！」

「助けてくれえええええ！！！！！！」

「まだ死にたくないいいいい！！！！！！」

「古墳だけはイヤだアアアアア！！！！！！」

「ギイヤアアアアアアア！！！！！！」

「グウアアアアアアアアア！！！！！！」

「アアアアアアアア！！！！！！」

僕のできること。

それは。

彼方たちのお墓に。

花を添えること。

花を添えてあげるから。

タマタマって呼ばないで。

第三話 うずもれたヒーロー

現在地球の総人口は200億人。
皆さんが知る数字をはるかに越えていると思われる。
いや。

その殆どがいらない人間なので。
数のうちには入らない。

自分を嘆いちゃいけないよ。
忘れよう。

笑って、忘れてしまえ。
楽しくさ。

そしてまた。

誰も知らない。

誰にも愛されない。

下らないヒーローが現れる。

『 戦え！ キグルマン 』

気象庁からテレビを通じ告げられる予測。

「巨大ハニワ注意報が警報へと変わりました。予測通過ルート付近の住人は極力外出を控え、畳の上へと移動してください。考古学者の発表によれば、静かに余計な手出しをしなければ畳の上で寝ながら古墳に入ることが出来ます。板敷きの家屋に関しては、これは全く残念としか言いようがありません、このフローリング野郎！と呼ばれることでしょう。非常に残念です。日本人として非常に残念でございます、ええ、まったく草の臭いも嗅がずに死ぬなんて恥そのものでございましょう！！」

巨大ハニワは時と場所を選ばない。
朝からせつせと働くんた。

せつかくの警報も間に合わず。

人々は畳の上で古墳に入ることとは出来なかった。

竜巻の如く通り過ぎ。

路傍の古墳が増えていく。

コンクリート古墳。

花を抱えてよちよちと。

小さな人形が歩いている。

人形？

いやその姿はもはや人の形をしていない。

周りに張り付いていた布は無く。

綿のようなものが、ズリズリと引きずるように進んでいる。

彼の名前はキグルマン。

つまらない愛の為に。

あえてその身をヌイグルミへと変えた少年。

キグルマンは道々に点在する古墳一つ一つに献花を捧げていった。ヒーローなのに何もすることが出来ない。己の無力を嘆いては花を添えていくのだ。そして、名も知らない人のため。墓碑銘を刻む。

『道端で倒れしこのコンクリート野郎 ここに眠る』

ここで一度キグルマンの物語が終わる。

死ぬ方法なんて簡単なもので。

キグルマンは踏まれたんだ。

足にさ。

相手はその存在に気付かずさ。

ホコリの塊程度にしか思わなかったのだろう。ただ。

人間だって。

燃やされるかそのまま埋められるかは知らないが。

ゴミのようになって、地に帰る。

そして踏まれ続けるんだよ。

誰かもわからない足にさ。

ともかくだ。

キグルマンは踏まれた。

ペしゃんこになった。

もう動けやしない。

三流ヒーローの最後なんてこんなもの……。

だけれどさ。

どうしようもないモノほど世にのさばる。

やっぱり、必要な人間は少なくて。

不必要な人間ほど多い。

キグルマンはあっけなく生きていた。

キグルマンは目覚めた時。

自分の手足を見て驚いた。

それは新しい手、布の手。

新しいからだ、綿の体。

そして何より新しい目、宝石の目。

新生、キグルマンが誕生していた。

いっちょ前に、マントなんかが装着されている。

ただ、身体は小さいまま。

力も元のまま。

足も遅い。

空も飛べやしない。

グズで。

のろまで。

役立たず。

目覚めた場所は。

彼をヌイグルミへと改造してくれた、あの秘密組織ではない。

ごく一般的な家。

そして女性が一人。

「目覚めたわね」

「目覚めたようね」

女性が一人、そこには居た。

ニタニタ笑い、キグルマンに近づく。

そして自己紹介をするかのように、胸に手を当てた。
ボタンを一つ一つ外していく。

キグルマンはドキマキした。

なんと言っても心はまだ少年。

わけの解らない興奮に陥る。

見れば女性の顔は美人。

ただ、お腹がぽっこりと飛び出ている。

ヒーローは見ちゃダメだ！

ヒーローは見ちゃダメだ！

祈り虚しく、宝石の目は輝いている。

そしてとうとう、大きな胸があらわとなり。

ついでに大きなお腹があらわとなった。

女性は自らのへそに指を突っ込む。

クチュクチュクチュ

やがて両手の指が全て入り。

一気に腹を縦に引き裂いた。

血はこぼれていない。

腸もこぼれていない。
ぽっこり突き出たお腹に収められていたものは、
もう一つの顔だった。

ニタニタと二つの顔が笑う。

上の顔が叫ぶ「あたしの名前はクリス」
下の顔が叫ぶ「あたしの名前はトリス」

「二人合わせてクリトリ・・・」

キグルマンは目を見張った。
始めて見る女性の体。
生命の神秘を感じた。

「ちょっと、最後まで言わせなさいよッ!」

ともかくだ。

キグルマンを助けたのは彼女達だった。

少し説明がいるかもしれない。
彼女クリスのお腹の中に入っているのは、赤ん坊なんかじゃない。
れっきとした人の顔。

彼女の姉、トリスの顔。
生首が腹の中に収められている。
納得しましたか？

彼女等がキグルマンを助けた理由はというと。

「あたし達のマスコットになってくれない？」

という、皮肉的なもの。

ヒーローからマスコットへの格下げ。

さらに役立たずの烙印を押されたようなものだった。

クリスとトリスはキグルマンとは違い、ちゃんとしたヒーローである。

人を守り、街を守り、国を守っている。

ただ、何時だつてか彼女達は笑いもの。

その奇妙な身体を見れば、指を刺さずに笑いをこらえる事なんて出来ない。

ただ、それでも。

ヒーローだった。

「そう、私たちはヒーローなのよ。ねえトリス姉さん？」

「そうよクリス。むさい男なんていない、女盛りの女ヒーロー！」

「戦おう巨大な悪に！ 救いましょう人の心を！」

「完璧、完全、完遂のオオオオオ！」

「誰が呼んだか美女皇帝クリスとトリス！二人合わせてクリトリ……」

今彼女達は奴を追っている。

あの人々を恐怖に陥れた巨大暴走八二ワを。

そして、奴を追っている最中に。

見つけたのだ。

古墳に花を添える物体を。

キグルマンを。

足の綿ぼこりの中から。

「だから！最後まで言わせてえ……」

キグルマンは考えた。

ヒーローにとってマスコットになるということは屈辱以外何者でもない。

テレビを見ていたらわかるだろう。

マスコットメインの物語は全話中たった数話。

出番が少なすぎるのだ。

だけれども。

キグルマンはマスコットになる事を承諾した。
何故って。

プルン

彼女たちの胸に引かれていた。
ヒーローといえどもまだ少年。
もう「ちょっと」いてもいいかな「いいよな」ちょっとだけ。
なんて……。

ブルン

ニヘラヘラ

天気を操り天気を司る。

気象庁の予測より早く不確定な巨大八二ワの行動。

このまま追いかけていただけでは、奴の影さえ捕まえることは出来ない。

だがしかし。

彼女達には策戦があった。

こちらから追いかけるのではなく。

おびき出そうという。

そしてクリスが手にしたのはスコープ。

キラキラと刃先が磨かれた殺傷能力の高いスコープ。

これで何をするかといえば。

墓荒し。

奴らが作った、古墳を荒らすこと。

場所は大阪府堺。

大仙陵古墳。

日本最大の前方後円墳。

邪魔されぬよう。

観光客と警備員は百舌の速贄として、木の枝に吊るし。

外堀と内堀を泳いでわたり。

古墳の真ん中に旗を立て。

そしてゆっくりと墓を荒らすのだ。

サクサクサクサク

穴を掘る。

「ねえ、トリス姉さん。本当にこんな事でいいのかしら」

「何が？ クリス」

「墓荒しが」

「いいのよ。金閣寺だって燃えたでしょ？ 石器だって捏造されたでしょ？ だったら墓も荒すべきなのよ」

キグルマンはといえば。

自分自身と同じぐらいの大きさの。

殺傷能力の高い小さなスコップを使い。

サクサクサクサク。

穴を掘る。

ドスン・・・

「あら姉さん」

「なあにクリス？」

「罨が反応したようですわ」

「そのようね」

土の塊が地にもぐる音が聞える。

木に吊るした、警備員や観光客が。

ぶら下がったまま古墳になっている。

空中古墳。

もちろんその重さに耐えられなかった枝は。

ひしゃげ、折れ曲がり。

古墳を地面へと叩きつける。

ドスン・・・ドスン・・・

古墳が作られたという事は・・・

奴が来たということ・・・

あの化物は、人を見たら古墳を作らずにはいられない。

ドスン！ ドスン！ ドスン！

次々と空中古墳が落ちていく。
地響きが、キグルマンの身体を転がす。

ドスン！！！！！！！！！

・・・

最後の地響き。
そして音は止まった。

出た

巨大暴走ハニワ

「来たわ来たわ来たわ！」

「やっちゃんいなさいクリス！」

「いいわよね〜姉さんは。何時だってお腹の中なんだから。キグルンは危ないから、胸の中に入れてね〜」

「それとも私の口の中がいい？ ンア〜ん」

キグルマンは四の五の言わず。

素早く。

クリスの胸の谷間に。

戦いは壮絶を極めた。

巨大暴走ハニワは一匹じゃない。

何体も何体も一緒に埋葬されるもの。

何百匹もハニワひしめく大仙陵古墳。

ヒーローのクリスとトリスは。

スコップを振り回しながら。

ハニワをパカンパカンと割っていった。

土器、結構割れやすい。

激しい殺陣に揺れる胸。

谷間に挟まったキグルマンは至福の一時を味わっていた。もう、ヒーローの面影はない。

「どうして！ どうしてこんな事になってしまったんだ！ 僕は・
・僕はヒーローなのに・・ヒーローなのに・・馬鹿なツ！ 敵
に背を向けて隠れていただけじゃないかッ！ どうしてこんな事に・
・僕は何をしていたんだ！ 僕は・・僕は・・僕は・・ど
うして・・どうしてこんな事に・・この世は闇だ・・」

キグルマンはクリスの胸に遺書をしたためた。

『このおっぱい野郎 ここに眠る』

そして胸の谷間の奥の奥へと入り込み。

眠りに付いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9923d/>

戦え！ キグルマン

2010年10月25日01時27分発行